

# ひかりのこ

6月園便り

聖ミカエル幼稚園

2016年5月24日

## 月主題：感じて

### 『おふくろの味』

5月13日に、子ども達は一週遅く、母の日の「お母さんの絵」を持ち帰りました。私も見せてもらいましたが、どの絵も伸び伸び思い思いに表現されていて、大好きなお母さんのことを心に思って、一生懸命描いたのだらうなあ、と感じました。

子ども達にとって、お母さんは、誰にも代えがたい特別な存在です。おっぱいをもらえた、という物理的なつながりだけでなく、心の「安全基地」として、お母さんを捉えています。「いつも自分を見ていてくれる。心配してくれる。お母さんがいれば僕は、私は大丈夫。」という思いがきちんと育ってくると、お母さんを離れて、どんどん外の世界へと、冒険に出て行けるのです。入園したての頃、朝、なかなかお母さんと離れられなかった子も、年中さんになれば、元気に「行ってきます！」と言って、ずんずん階段を上って行きます。これは、おかあさんを忘れてしまうのではなく、「離れていても、あとでお母さんと会えるから大丈夫。」という確信があるので、お友達という外の社会で、生活ができるのです。

この心のつながりは、青年期になっても時に大切になります。青年期になっても、心の安全基地、つまり家族や、恋人や仲のいい友達との心のつながりが、欠かせないのだといえます。

私には、3人の子供がいます。上から26歳、22歳、20歳と、皆成人し、長男はもう数年前から一人暮らしをしています。長男は、広告代理店に勤め、やりがいをもって仕事をしています。その長男が、「お母さんのミートソーススパゲッティ、それにコロッケ、ときどき無性に食べたくなるんだよなあ。」と言います。私は中学校の教員として働きながら子育てをしましたので、平日の夕飯などはあまり凝らない、ぱっと作れるものばかりでした。でも、素材には気を使って、できるだけ無農薬、無添加のものを選んで作っていました。(もちろん時には、「今日は家事したくない。外食！」ということもありましたよ。)

長男は学生時代、パスタ専門店の厨房でアルバイトをしていましたから、私のミートソーススパゲッティなどより数段おいしいパスタを作れるのですが、「お母さんのは別の食べ物」なのだそうです。コロッケは、自家製のじゃがいもを茹でて潰した中に、生活クラブの豚ひき肉、低農薬の玉ねぎ、すりおろした生姜を炒めたものを、たっぷり入れます。

最近、スーパーやコンビニのお惣菜コーナーが広く取られているのが気になります。ひとり暮らしのお年寄りのためでしょうか。

皆さんは、毎日大変な思いで育児をされていると思いますが、できるだけ、手作りで添加物の少ないものをお子さんに与えてあげて欲しいと思います。お子さんが、大人になって多くのものと戦わなくてはならなくなった時、心と帰りたくなる、帰ることができる安全基地が必ず必要になるからです。どうぞ、お子さんに「おふくろの味」を持たせてあげてください。

園長 渡部 良子

## キリスト教保育

6月の暗唱聖句から

「神はご自分にかたどって人を創造された」

(創世記 1 : 27)

最近知って驚いたことがあります。私の親戚筋が父方のルーツを調べたところ、富山県の山深い地域に辿り着きました。どうやらそこは平家の落人が命からがら逃げ延びた場所で、そういう事情でもなければ誰も住もうとは思わない険しい所ようです。本当だとすれば、それが大昔のことであっても、要するに自分には「敗者」の血脈があるのかと思うと、これまでの人生を振り返って、私は妙に納得するものがありました。同時に、人は自分の意志で生まれる家を選べないという現実を思い起こしました。

このような人間の「肉」の部分に属することが、しばしば人を絶望の淵に追いやるのですが、しかし聖書は、魂の部分では、人間は明らかに神に属していると語ります。そして、ここに救いがあります。「かたどる」とは、「うりふたつ」とも解釈されます。生まれた家にまつわる人間の幸、不幸を超えて、私たちはすべて、神さまそっくりに造られた尊さ、かけがえのなさを持っているのです。私たちの中には、実際の親のDNAとともに、神さまのDNAがあること。そこに目を留めるときに、安らぎと、共に生きようとする姿勢が芽生えてきます。

子どもたちは大人に多くを委ねながらも、大人が忘れかけている人間の尊さを、思い出させてくれる大切な存在です。

チャブレン 司祭 下澤 昌